

斜面をつづる こどもの帯

見沼の斜面林におけるこどもの遊び環境の再構築

都市デザイン学分野
小林珠枝

ランドスケープ
子ども

ヴォイド
土木と建築

斜面

1. はじめに

1.1 斜面とこどもの遊び環境

斜面は豊かなこどもの遊び環境で、身体の発達のためにも重要な空間的資本である。¹⁾しかし、通常の宅地開発では、災害対策や経済的な合理性から、切土や盛り土により斜面が平らにされたり均されたりして、消滅してしまうという現状がある。こどもが育つ空間としての斜面という視点から、都市空間の在り方を再考する。

2. 敷地概要

2.1 地形と人々の生活

埼玉県さいたま市に位置する見沼田んぼは、河岸段丘の低地部で、その周縁部にはかつて斜面林が存在した。斜面林は江戸時代から残る見沼田んぼ固有の資源のひとつであり、かつては個人所有の林や神社の雑木林が隣り合うことで带状に連なる斜面緑地空間であった。様々な生態系の居場所であると同時に、里の領域と田の領域のバッファーとなり、暮らしの中に入り込んでいた(図1)。また、台地と低地の境界に位置する斜面林は、住宅の近くにありながら、高低差が大きすぎず、豊かな勾配を持っているため、こどもの格好の遊び場となっていた。

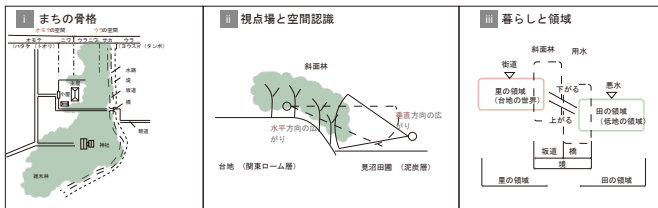


図1：斜面林と暮らしの関係性²⁾

2.2 現在の斜面のデザインサーベイ

台地と低地の境界線に沿って歩き、斜面林の現状を調査した。斜面は用水路と近づいたり遠ざかったりし、勾配を変化させながら蛇行しており(図2)、独特の風景を作り出していた。現在、ほとんどの斜面林は伐採され、宅地開発により擁壁や建物と同化しているものの、一部は開発から取り残され、線状に連なる斜面のヴォイド空間が散見できる(図3)。

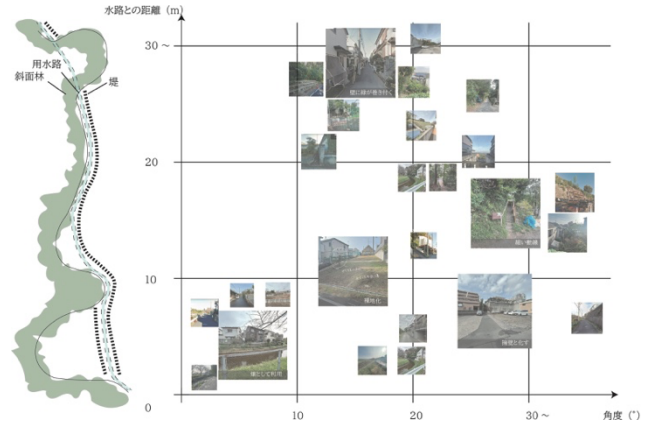


図2：水路と斜面林

図3：斜面の使い方を分類したマトリクスの位置関係

3. 提案

3.1 提案のプロセス

こどもが斜面をいなし遊ぶ様子の観察や、かつて自身が斜面林で遊んでいた記憶をもとに、斜面におけるこどものふるまいをスケッチした。その中で、斜面におけるあそび環境の重要な要素として、樹木や水系、地表面の起伏という外的要素と、「もぐる」や「這う」など、こども特有の動きによる内的要素を抽出した(図4)。

外的要素	内的要素
・立体的な水系	・もぐる
・地表面の起伏	・またぐ
・根を張る木々	・駆け下りる
・上下の境界性	・駆け上る
・垂直方向にのびる空間	・眺める
・線的な連続性	・寝転がる
	・這う
	・滑る
	・よじ登る
	・見上げる
	・腰掛ける
	・くぐる

図4：抽出したあそび空間の要素

抽出した要素をもとに、断面的な関係性の操作により、斜面における遊び環境を再構築する方針とした。

3.2 設計提案

本提案では、さいたま市の中で宅地化圧力が高く、斜面林が減少している場所のなかで、敷地内の勾配の変化が多様で、小学校に近接している敷地を選定した(図5)。住宅と田圃の境界にある斜面という特性を生かし、通常の閉じた

箱型の施設ではなく、地域に見守られながら大自然との接点を持った「みち」と、それに付随する室内部分を内包した児童館を計画する。



図 5:敷地図

3.3 設計手法

通常、斜面に建築する際は擁壁をつくり、平場を作る。周辺のサーベイで、人間の開発によってできた小さな擁壁は、斜面の中で人々の暮らしの拠り所となっている風景が散見された。本提案では、人のふるまいをうむ壁をデザインにとり入れる。ゆるやかなカーブの壁を地形に沿って配置することで、大地に面的な領域をうみ、輪を作るような子どもの遊びに対応する(図6)。また、壁の高さの変化や開口によって、周辺住宅との関係性や、水路や田圃への視線の抜けなどの操作をすることで、身体の大きさの違いによる見える景色が変化していく。さらに、敷地の高低差を利用した「水のみち」と、壁に沿う木材の床によってできる一定の勾配をもった「みんなのみち」、床下にできる豊かな勾配変化のある「こどものみち」の三つのみちを計画する(図7.8)。

床の幅や壁の高さ、地表面との距離が変化することによって、こどもの体験は多様化する。壁は地形に沿ってつづら折りになっており、完全には閉じきらず、一方に開いていくような形態にすることで、斜面に面している個人住宅の庭や、見沼田んぼの風景と視覚的、空間的に接続する。斜面におけるこどもや樹木、水のふるまいをまとわせながら斜面に伸びていく新たなインフラの提案である。

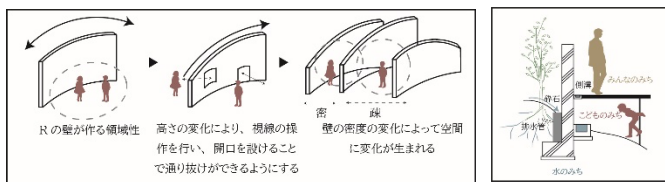


図 6:曲面壁による操作

図 7:三つのみちの断面関係

壁の配置



地形を読みつつ折りに壁を配置することにより、周囲の住宅の庭に視界が接続する

みんなのみち こどものみち



壁に沿ってみちをつくる。折り返し部分では地表面とレベルを合わせる。みちは地面に沈んだり浮いたりしながら、斜面との関係性を作っていく。

水のみち 植栽配置



壁によって水の流れができ、植栽の涵養作用を促す。また、水路として水が現れる場所はこどもの遊び場となる。

図 8:三つのみち、壁、植栽のレイヤー図

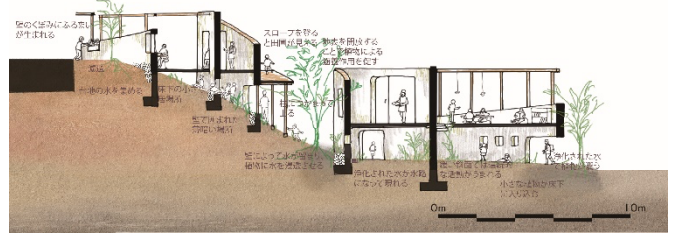


図 9:断面図

4. 結

本提案は、地形が生み出す揺らぎを建築によって、保存または増幅させ、こどもたちが自身の身体を制御しながら力強く育っていくため環境に再編していく計画である。この建築を起点として、将来的には周辺の斜面林やその跡地にもこどもたちの居場所を拡張させ、点から線、そして面へと地域の中で育つこどものための環境を構築していくことを見据えている。地形が開発によって均質化していく中で、忘れられつつある斜面の本来の価値であるこどもの遊ぶ豊かな環境として再構築することで、見沼田んぼ周辺で行われている画一的な開発へのアンチテーゼとなるとともに、歴史や街の文脈から、斜面に空間的な資本としてのポテンシャルを見出し、動的に活用保全していく手法を示した。

[脚注]

- 1)参考文献[1]より引用
- 2)参考文献[2]より筆者作成

[参考文献]

- [1]木村歩美,『園庭の築山に関する研究～子どもにとって魅力的な遊び環境を創造する試みその1』,2004
- [2]宇杉和夫,『見沼田んぼの景観学—龍のいる原風景の保全・再生』,古今書院,2004